

おうしゆくばい
長唄「鶯宿梅」の中に秘められたメッセージ～日舞を通して考える人権と文化再発見～について

おうしゆくばい
長唄「鶯宿梅」

今年初めて咲いた梅がまるで初恋の人を待つ様にウグイスのおとずれを待ちこがれています。そんなところへカラスが「ウグイスじゃ」と嘘をついて一夜の宿を借りるのですが、そこへ本当のウグイスがやってきて……。

後は観てのお楽しみですが、この曲の中には様々な人間模様が隠されています。

いたずらをしては、周りに迷惑ばかりかけるカラス。ウグイスしか自分の家に泊めないという梅。正義感の強そうなウグイス。

中でもカラスは、夏には鶉うの真似をして川に飛び込みおぼれかけたり、一見、目立ちたがりやのいたずら坊主といった感じですが、実はいちばん寂しがりやで友達がほしいのです。仲間に入れてもらいたいのです。私は、このいたずらカラスが愛しくてたまりません。

一途にウグイスを待つ梅は、自分では気がついていないかもしれませんが、「ウグイスにしか宿を貸さない」という言葉は「ウグイス以外の者は排除する」という事です。

無意識のうちに私達は人を傷つけている事もあるのです。どこかのホテルで同じ様な事がありましたね。元ハンセン病患者の人達に対する偏見から生じた人権侵害でした。

日舞「鶯宿梅」をごらんいただいて、何かの気づきの場になれば嬉しいです。

藤間勘史卯